

## 会長就任のあいさつ

一般社団法人 日本社会福祉学会 会長 木原 活信 (同志社大学)

このたび、日本社会福祉学会の会長（第7期）に選出されました同志社大学の木原活信です。歴代の会長のイメージからすれば、若輩者の私にこの歴史ある学会の会長が務まるのかと躊躇せざるを得ない面もありますが、だからといって、あまり背伸びすることなく、あくまで私流に自然体で臨みたいと思っています。「俺についてこい」というカリスマ的リーダーではなく、“サーバントリーダー”として、仕える立場で、役員のお力添えをいただき、自らの微力を尽くすことでその責に応えたいと存じます。皆様におかれましても、学会運営に一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

私は、これまで学会誌編集委員長、国際学術促進委員長、副会長など務めさせていただきましたので、この学会が置かれている現在の状況についてもある程度、理解しているものと思います。任期中にすべてができるものでもありませんが、幾つか取り組むべき課題をあげてみます。

一つは、ここ数年学会員の減少に歯止めがかからない状況にあります。この減少傾向に歯止めをかけること（人数を増やすこと）だけを目的化してはいけませんが、少しでもその原因（声）をつかみ、まずは具体的にその減少を食い止めることに対処することは必要であろうと思います。その前提となるのが、学会規模が巨大である面、会員相互の顔が見える学会でなくなっている点であろうと思います。互いに顔が見えるコミュニティにしていくことが必要であろうと思います。ただし、それは同質価値の者だけが同一目的で集まるような閉じられたコミュニティではなく、アカデミックなコミュニティに相応しく、異質な他者が自由闊達に議論しあえるような、開かれた公共空間であるべきだと思います。そのためにも今まで以上に、Web、SNSなどの積極的活用が必要になると思います。内向な議論に終始する学会ではなく、学会外へも発信することを通して、社会的責任を果たしていくことが必要であろうと思います。

もう一つ大きな課題は、本学会として、新型コロナウイルス感染症(covid-19)にどのように対峙していくのか、厳密にはそれはもはや対峙するというより、それを前提に生きていかなければならないようですが、その課題に直面しています。奇しくもこの嵐の只中に、会長のバトンを手渡されたことは何の因果がわかりませんが身の引き締まる思いです。別の見方をすれば社会福祉学という学問が、コロナという災害にどう応えていくことができるのか社会から試されているのだと思います。当然ながら感染症の治療・予防は医療の専門家に委ねるとして、コロナによって引き起こされる生活問題、社会的問題、つまりポストコロナ問題は同様に重要です。もうすでに起こっている（起ころうとしている）大量の失業問題、貧困問題、パンデミックになった福祉関連施設の問題、ポストコロナに伴い予想される自殺問題、ステイホームの副作用から生じていると言われる依存症、虐待、DVなどの家庭内の暴力の問題も深刻です。このような問題を社会科学的に分析して、その対策についても速やかに社会へ発信していくことは学会の使命であろうと思います。

人類史の長いスパンでも、大きな感染症の後の社会は価値転換が起こることを歴史が物語っているところですが、コロナ後の社会においても、様々な価値転換が起こり、これまでとは一変してくるのではないかと思います。それは学会の在り方そのものにおいても例外ではないのかもしれませんが。その一つは、大学などでもオンラインによる授業が導入され、それに我々もすでにある程度馴染んできておりますが、同様に、学会も web 会議、そしてこの9月の大会で先取りするように Web でのネット配信による学会を予定しています。これはあくまでコロナ感染防止のための、やむを得ない代替措置ではありますが、しかし案外歴史が示すように、やむを得ずに必死でただ生き残るためにはじめたことが、新しい時代のスタンダードを生み出すことがあるのではないのでしょうか。変化を嫌う学会、変わらない学会に対して、期せずして嵐のようにやってきたコロナに、揺さぶられるようにして、今までの常識に囚われない新しい「形」への変革を余儀なくされるのではと予感すらします。

コロナの暗雲漂う先に見えない時代の諸々の課題を抱えた状態の第7期ですが、私よりも遥かに経験豊富な役員の方々の全面的なご協力を頂きながら、何とか委ねられた 2年間重責を果たしたいと思っておりますので、何とぞ宜しくお願い申し上げます。最後になりますが、重ね重ね、会員の皆様のご理解とご協力をお願いし、会長就任のあいさつとさせていただきます。